

船中のロンドン女性いわく「宿屋ではわれわれの嗜好を見て、『新しい女』だとびっくりしたにちがいない」,あるいは『『新しい女』は将来,男性から申し込みなんか受けないで,こっちから,男性に申し込むだろうな.それができたら,愉快だなあ!」云々(ブラム・ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』).

●より生々しい日本の「新しい女」“New Woman”またはその訳語として各国に伝播した新奇な女性タイプのイメージは,世界各国でそれぞれの事情に応じた流布をみていった.なかで,発生源のイギリスから約20年遅れて花開いた日本の「新しい女」は,雑誌の挿絵や小説本の登場人物のようなメディア上の芸術的表象を経由して公衆に浸透した部分の大きかったイギリスの“New Woman”からみると,現実の社会に行動する生身の女性のイメージがより直截に人々に衝撃を与えたようにみて取られる.また,そのような存在としての「新しい女」が,外部から押しつけられたこの蔑称をあえて開き直って引き受ける形で身に帯びていくというパターンも,イギリスにおけるより明確に読み取られる.これらをもって日本的「新しい女」の特質とすることも可能だろう.

すでにみた尾竹紅吉の奔放な言動を皮切りに,大胆な小説の掲載で発禁処分を招いた荒木郁子,『青鞥』を足がかりに武者小路実篤に接近して結婚に至り,小説『世間知らず』(1912)に「C子」として描かれた宮城(竹尾)房子(のち離婚),さらには九州から上京して活躍しながら,やがて大杉栄と不倫の四角関係に入り,神近市子による大杉刺傷という「日蔭茶屋事件」(1916)で渦中の人となった伊藤野枝と,生身の「新しい女」は世人の眉をひそめさせ続けたのである.

●『青鞥』前史としての「煤煙事件」このように,むしろ外部からの「新しい女」呼ばわりを引き受けていった彼女らの共通点として,スキャンダルへの親近性ともいべき特質が指摘できる.これは彼女らに世間の目への警戒心が薄かったというべきか,それともあえて呼び込もうという冒険的な意識があったのか,微妙なところだ.ともかく結果的にスキャンダルに踏み込むことになる青鞥社同人たちのこの傾向を考える場合,彼女らを全国から惹き寄せた『青鞥』のカリスマ,平塚らいてうその人が『青鞥』発刊以前に一大醜聞で汚名を着た人物であったことを無視するわけにいかない.カリスマの軌跡をなぞる意識が彼女らにあったか否かはともかく,その前史に吸収され,同じパターンをたどるという経過が発生



図1 新しがる女

【出典：服部亮英画『みのる・亮英子(ほうふら)漫画』p.33, 国立国会図書館デジタルコレクション】

しやすかったことはたしかだろう.

そのらいてうが『青鞥』創刊の3年半前に捲き込まれ,彼女の属した上流社会の一般人として生きることをもはや不可能とした一大スキャンダルが,世にいう「煤煙事件」である.妻子持ちの文士とのこの情死未遂事件で渦中の人となることがなければ,それとも彼女が『青鞥』のような事業に意欲をもったかどうか¹⁾も怪しい.日本女子大学を卒業後²⁾,独自に参禅や勉学を続けていた平塚明と,「閨秀文学会」で彼女を教えていた駆け出し作家の森田草平とが突然,夜逃げし,雪の塩原温泉郷山中を二人うろつくところを警察に保護されるというのがその経緯で,謎だらけのこの事件はメディアの好餌となった.事件は,1年後に草平自身がこの事件に材を採った小説『煤煙』を師匠の夏目漱石の推挙で『東京朝日新聞』に連載するに至って,「煤煙事件」と呼称されるようになる(らいてうはそれを嫌って「塩原事件」と呼ぶ).

この小説化で世人から忘れ去られる可能性をほぼ失った明の,それならいっそう叩かれついでにこれを引き受けてやろう,という開き直りが生んだ鬼子のような性格を『青鞥』は帯びている.してみれば,彼女に吸収された青鞥社同人たちについて上にみた,世のバッシングにむしろ開き直って活路を開くという行路は,らいてうの敷いた道をたどったもの³⁾ともいえる.青鞥社のこのような方向性が日本の女性解放思想の前進に大きく貢献したとあってよいなら,結果的にらいてうをそのような人に育てた『煤煙』もまたフェミニズムの進展に寄与したと評価すべきではあるまいか⁴⁾.

●「元始女性は太陽であつた」付言すれば『青鞥』という雑誌名も,もともと文学好きで術学的な女性をあざけっていわれた英語,“Bluestocking”をあえて引き受けようとした命名であって,「新しい女」の引き受けはすでにこれによって予告されていたともいえる.その創刊号には,「煤煙事件」の発端となった閨秀文学会の講師の一人でもあった與謝野晶子が「山の動く日来る」を寄稿し,らいてうは創刊の辞「元始女性は太陽であつた」を書いた.そこにいう「元始」が,後に高群逸枝によって言挙げされる「古代母系制」のような歴史的な意味を込めたものでなかったことは自伝に述べるとおりだし,女性を「月」に喩えたからといってベザントの小説に影響された形跡もない.それが指し示そうとしたものは,むしろ彼女が師事した禅僧,釈宗活(漱石の小説『門』[1910]に宜道として描かれる)から授かった公案「父母未生以前本来面目」の世界に近かったことが,当時のらいてうの諸作品には読み取られる(『『新しい女』の到来—平塚らいてうと漱石』⁵⁾).

[佐々木英昭]

参考文献

佐々木英昭『『新しい女』の到来—平塚らいてうと漱石』(名古屋大学出版会,1994)・川本静子『『新しい女たち』の世紀末』(みすず書房,1999)